

【担当教員】

小林 昇治・原 信一郎・高橋 秀雄

【教員室または連絡先】

環境棟2F268、267号室、機械建設1号棟403号室

【授業目的及び達成目標】

個々には偶然に(でたために)起こる現象もこれを多数観察すると明確な数学的法則に従っている場合がある。その法則を扱うのが確率論であり統計学である。本講義では、確率の考え方の初歩から始め、いろいろな調査や実験・観測により得られた資料(データ)の整理と分析、平均や分散、標準偏差等の各種統計量の扱い方、母集団の推定・検定等の統計学とその応用の初歩を学ぶ。

【授業内容及び授業方法】

基本的な重要事項を解説するとともに、具体的な例を随時示す。適宜受講生自身による演習を行う。

【授業項目】

1. 資料の整理と分析
2. 確率と確率分布
3. 2項分布と正規分布
4. 母集団と標本抽出
5. 推定と仮説検定

【教科書】

標準的な統計学の入門書を使用する。

【成績の評価方法と評価項目】

2回の教科書、ノート、電卓持ち込み可の筆記試験(各ほぼ40%)と講義時間中の演習(約20%)による。

【担当教員】

大塚 悟

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟801

【授業目的及び達成目標】

地盤の振動機構並びにせん断特性について学習し、地盤の動的解析の基礎に関して理解を深める。

【授業キーワード】

地盤の振動, 波動方程式, 地盤のせん断特性

【授業内容及び授業方法】

地震による地盤の振動機構に関する理解を深めるために質点系から連続体まで振動論の基礎について学習する。また繰り返し荷重に対する土のせん断特性について学び、等価線形化法や地盤の液状化機構について理解する事を目的とする。

【授業項目】

- 1週: ガイダンス
- 2週: 質点の運動方程式
- 3週: 振動特性によって異なる質点の運動
- 4週: フーリエ解析
- 5週: 多質点系の運動と数値解析
- 6週: 連続体の運動方程式
- 7週: 重複反射波の解法
- 8週: 繰り返し荷重に対する土のせん断特性
- 9週: 等価線形解析
- 10週: 地盤の液状化
- 11週: 液状化のメカニズム
- 12週: 震度法と地盤の残留変形解析
- 13週: 斜面の耐震安定解析
- 14週: 予備日
- 15週: 期末試験

【教科書】

特に指定しない。

【参考書】

参考書は適宜指定する。

【成績の評価方法と評価項目】

出席及びレポート, 期末試験

【留意事項】

受講者は地盤工学I, IIを受講していることが望ましい。

【担当教員】

宮木 康幸・下村 匠

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟709・703室

【授業目的及び達成目標】

鋼構造物・コンクリート構造物の設計計画作業を行うことを通じて、

- (1) これまで履修した構造物の力学特性・耐久性に関する計算方法を、実際の設計作業に適用する流れを体得すること
- (2) 創造力と専門知識・技術を駆使して、社会の要求を満たす構造物をデザインする総合的な力を養うこと
- (3) 与えられた制約のもとで計画的に仕事を進め、まとめあげる能力を身につけることを目的とする。

【授業キーワード】

鋼材, コンクリート材料, 構造解析, 設計論, 鋼構造, コンクリート構造, 施工計画, 安全性, 使用性, 耐久性, 性能照査, 景観

【授業内容及び授業方法】

学生一人一人が、コンクリート構造物および鋼構造物を各1つずつ設計する。学期の最初に課題の説明し、設計に必要な知識についてプリント等を配布し講義を行う。それ以降、各自で設計作業を進める。質問は、随時受け付ける。成果は、設計計算書と図面に取りまとめ、提出する。

【授業項目】

(1) コンクリート構造物の設計

以下のいずれかを選択する。

構造コース: 構造技術者を志向する者向けの課題である。コンクリート橋桁の材料設計・構造設計を行い、コンクリート標準示方書に準拠して、安全性、使用性、耐久性の照査を行う。

計画コース: 構造技術者以外の道に進む者向けの課題である。コンクリート構造物の概形を提案し、プレゼンテーションを行う。

(2) 鋼構造物の設計

道路橋示方書にしたがい、鋼橋の設計を行う。

【教科書】

特に指定しない。

【参考書】

コンクリート標準示方書〔設計編〕, 土木学会

コンクリート標準示方書〔施工編〕－耐久性照査型－, 土木学会

道路橋示方書・同解説「I共通編、IIIコンクリート橋編」, 日本道路協会

大学課程橋梁設計例(第7版), 菊池洋一・近藤明雅共著, オーム社

鉄道構造物等設計標準・同解説「鋼・合成構造物」, 運輸省鉄道局監修・鉄道総合技術研究所編, 丸善

【成績の評価方法と評価項目】

設計計算書および設計図により成績を評価する。

【留意事項】

コンクリート構造の設計に際しては、3年生2学期の「鉄筋コンクリート構造」4年生1学期の「コンクリート材料学」を、鋼構造の設計に際しては、3年生2学期の「鋼構造学」を履修しておくことが望ましい。

【担当教員】

細山田 得三・下村 匠・豊田 浩史

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟 808,705,807,703

【授業目的及び達成目標】

水工学, コンクリート工学および地盤工学についてそれぞれ以下の項目を授業目的及び達成目標とする。

- ・水工学実験

室内実験は以下の項目(1)から(3)のうち1つを割り当てる。

- (1)開水路の流速分布(室内実験):流速分布、抵抗法則について明らかにする。
- (2)水の波(室内実験):実験波と波の理論との比較を行い、両者の相違点を理解する。
- (3)開水路の水面形(室内実験):不等流現象に関して理解を深める。

数値実験は以下の項目(4)から(6)のうち1つを割り当てる。

- (4)U字管の減衰振動(数値)

【授業キーワード】

- ・水工学実験

数値実験、ルンゲクッタ法、開水路、波動、跳水、振動、噴流、層流

- ・コンクリート工学実験

コンクリート、配合設計、フレッシュコンクリート、高流動コンクリート、プレストレストコンクリート、鉄筋コンクリート

- ・地盤工学実験

土質力学、強度特性、相似則、模型実験

【授業内容及び授業方法】

受講者全体を2班に分け、それぞれの実験項目に定められた内容の実験を各週毎におこなう。班の構成は受講者数などを勘案して教官が決定する。
実験後1週間以内にレポートを提出する。

【授業項目】**【授業項目】**

・水工学実験(グループ分けにより、室内実験と数値実験を1つずつ割り当てる。)

第1週 室内実験および数値実験の手法について説明する。室内実験(水槽実験)の実施

第2週 室内実験をTAの指導を受けながら実施する。数値計算のアルゴリズムを調べる。

第3週 室内実験および数値実験の結果整理、および計算プログラムの作成を行なう。

第4週 レポートの内容についてTAおよび教官のチェックを受け、不備と判断されたら再提出する。

- ・コンクリート工学実験

第1週 普通コンクリートと高流動コンクリートを製造し、ワーカビリティを比較する

第2週 プレストレストコンクリート梁にプレストレスを導入する

第3週 鉄筋コンクリート梁の曲げ試験

第4週 プレストレストコンクリート梁の曲げ試験

- ・地盤工学実験

第1週 粘土の一軸圧縮試験

第2週 粘土の一面せん断試験

第3週 粘土の三軸圧縮試験

第4週 地盤模型実験

【教科書】

特に指定しないが、参考として、土質実験については、「土の試験実習書」地盤工学会編 あるいは土質力学の教科書。コンクリート実験については鉄筋コンクリート工学の教科書。水工実験については実験指導書を配布する。

【参考書】

- ・水工学実験

日野幹雄著:「水理学」(丸善)、
早川典生 著:「水工学の基礎と応用」 彰国社

- ・コンクリート工学実験

河野 清, 田澤栄一, 門司 唱 著:「新しいコンクリート工学 訂正版」(朝倉書店)

岡村 甫, 前田詔一 著:「鉄筋コンクリート工学」(市ヶ谷書店)

- ・地盤工学実験

地盤工学会編:「土の試験実習書」(地盤工学会)

【成績の評価方法と評価項目】

レポート100% なお、実験を欠席した場合は不合格。

【留意事項】

- ・水工学実験

水理学II、応用水理学の知識を必要とする。また、適宜、数値計算の基礎を自習する必要がある。

- コンクリート工学実験

コンクリートの材料および構造両面での知識が必要であり、コンクリート工学(2年2学期)および鉄筋コンクリート構造(3年2学期)を履修しておくことが望まれる。

- 地盤工学実験

土質力学に対する基礎的知識が必要であり、地盤工学I(3年1学期)および地盤工学II(3年2学期)を履修しておくことが望まれる。

【担当教員】

全教官

【授業目的及び達成目標】

建設工学のひとつの専門分野に関する演習を通じて、

- (1) 実務訓練・課題研究において実務・研究を進めるための専門的知識の基礎を養う
- (2) 研究発表におけるプレゼンテーションとディスカッションの方法を学ぶ
- (3) 日本語および英語で書かれた学術論文・文献を解釈し、専門的知識を自律的に習得する方法を学ぶことを目的とする。

【授業キーワード】

建設工学, 土木工学, 社会基盤工学, プレゼンテーション, 文献解釈

【授業内容及び授業方法】

配属された研究室単位で、担当教官のもと、セミナー形式で行う。

【授業項目】

以下の内容について、演習を行う。詳細は担当教官、年度ごとに異なる。

- (1) 配属された研究室の専門分野に関する文献(和文・英文)の解釈
- (2) 研究発表におけるプレゼンテーションとディスカッションの演習
- (3) 配属された研究室の最新の研究内容とその学術的・技術的背景の理解

【教科書】

特に指定しない。

【参考書】

特に指定しない。

【成績の評価方法と評価項目】

出席し学習すること、および宿題の成果によって成績を評価する。

【留意事項】

学期初めに配属研究室の教官より指示が掲示される。

実務訓練
Internship (Jitsumu-Kunren)

実習 8単位 2-3学期

【担当教員】

全教官

【授業目的及び達成目標】

企業、行政機関等で、実際の技術的課題を責任ある技術者と一緒に解決する体験を通して、建設工学、土木工学における実践的・技術的感覚を養うとともに、大学院での研究目的の明確化を図る。

【授業キーワード】

建設工学、土木工学、社会基盤工学、情報技術、デザイン能力、自主的学習、技術者倫理

【授業内容及び授業方法】

訓練先の機関において、担当者の指導の下に、実務課題の解決に関する実習・訓練を行う。ただし、学生は単なる実習生にとどまらず、正規社員、職員と同様の業務につき、まさに実務を体験する。これまでの学習の成果、知識を結集して、自ら実務課題を探求し、組み立て、解決する。

【授業項目】

訓練先の担当者による。

【教科書】

訓練先の担当者による。
「実務訓練の手引き」長岡技術科学大学

【参考書】

訓練先の担当者による。

【成績の評価方法と評価項目】

実務訓練報告書、訓練先の担当者による実務訓練評定書および実務訓練発表会での発表内容を総合的に判断して、可否を判定する。

【留意事項】

第4学年第1学期までの単位取得状況が本課程の定める受講基準を満たし実務訓練有資格者と判定され、大学院に進学予定の学生は、本科目を履修する。
実務訓練シンポジウムでの実務訓練機関の指導者、教官、学生の体験談を聴講し、実務訓練の目的、内容を十分に理解しておくこと。また、予定配属研究室の指導教官の事前指導に従うこと。

【参照ホームページアドレス】

<http://www.nagaokaut.ac.jp/j/gakusei/syllabus.html>

【担当教員】

全教官

【授業目的及び達成目標】

建設工学の特定課題の研究の遂行を通じて、

- (1) 当該課題の工学的背景および学術研究を行う意義と目的を正しく理解すること
- (2) 実験を計画・遂行し、結果を正確に解析し、工学的に考察し、かつ成果をとりまとめ、説明する能力を養成すること
- (3) 建設工学の専門的知識・技術を総動員して課題を自律的に探求し、解決する能力を養成することを目的とする。

【授業キーワード】

建設工学, 土木工学, 社会基盤工学, 学術研究, 自律的学習

【授業内容及び授業方法】

指導教官による。

【授業項目】

研究課題は指導教官による。

【教科書】

指導教官の指示による。

【参考書】

指導教官の指示による。

【成績の評価方法と評価項目】

課題研究をまとめた学術論文, その口頭発表と討議により成績評価を行う。

【留意事項】

本科目は、実務訓練を履修しない学生(大学院に進学しない者, 社会人入学者等企業において十分な期間の実務経験のある者)が履修する科目である。ただし、前年度末における単位修得状況により、本年度に卒業が見込まれることが履修の条件である。

【担当教員】

丸山 久一・天野 光一・小澤 一雅・岡本 享久・松岡 康訓

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟701

【授業目的及び達成目標】

建設工学課程で履修する内容の全体像を把握するとともに、建設技術と社会との関わり、建設技術者としての倫理および社会的責任、環境に配慮した技術革新等についての理解を涵養するために、以下の内容の修得を目的とする。

- (1) 建設技術の歴史的経緯
- (2) 建設技術者の倫理および社会生活との関わり
- (3) 建設工学が扱う学問領域
- (4) 構造物の設計と施工の実際
- (5) 景観デザインを考慮した構造設計
- (6) 建設における材料開発
- (7) 建設マネジメント

【授業キーワード】

建設工学、土木史、技術者倫理、環境問題、建設産業、構造設計、施工、景観デザイン、建設材料、建設マネジメント

【授業内容及び授業方法】

板書、プリント、OHP等を用いて講義する。講義は、非常勤講師を含む複数の教官が、それぞれ専門とする分野について平易に講義をする。内容のより深い理解を促すために、各自で調査するレポート課題を6～9回出し、建設工学の全体的な内容、位置付けに関する理解を深める。

【授業項目】

- 第1週 建設工学の枠組み、歴史的展開
- 第2週 社会生活と建設技術との関わり
- 第3週 建設工学と技術者倫理
- 第4週 建設工学の学問領域
- 第5週 環境問題と建設工学
- 第6週 構造物の設計法
- 第7週 建設材料の現状と課題
- 第8週 構造物の景観設計I
- 第9週 構造物の景観設計II
- 第10週 構造物の耐震設計
- 第11週 建設施工の現状と問題点
- 第12週 建設施工における技術革新
- 第13週 建設マネジメントI
- 第14週 建設マネジメントII
- 第15週 建設工学の将来展望

【教科書】

特に定まった教科書は使用しない。

【参考書】

土木学会誌、日経コンストラクション、各種新聞、その他であり、必要に応じて、授業中で紹介する。

【成績の評価方法と評価項目】

出席点10%、レポート90%で成績の評価を行う。

レポートにおいては、課題に対する調査・理解の深さ、独創性に重点をおいて採点する。

【留意事項】

上記の授業項目の順序および時間は、非常勤講師の都合により、変更する可能性があるので注意されたい。

【担当教員】

丸山 暉彦・杉本 光隆

【教員室または連絡先】

707・808

【授業目的及び達成目標】

「解析学要論」・「応用統計学」で学習する数学を、建設工学課程に関連する分野でどのように利用するかを、例題を基に学習する。

【授業キーワード】

偏微分方程式、確率、統計

【授業内容及び授業方法】

例題を基に、講義項目に掲げる数学的手法の基礎的事項を講義するとともに、実際の問題にどのように応用していくかを示す。

偏微分方程式では、教科書として E.クライツィグ著「フーリエ解析と偏微分方程式」培風館 を使用する。

【授業項目】

1. 偏微分方程式
 - 1.1 基本概念
 - 1.2 モデル化: 振動する波、1次元波動方程式
 - 1.3 変数の分離(乗積法)
 - 1.4 波動方程式のダランベールの解
 - 1.5 1次元熱流
 - 1.6 無限に長い棒の中の熱流
 - 1.7 モデル化: 振動する膜、2次元波動方程式
 - 1.8 長方形膜
 - 1.9 極座標でのラプラシアン
 - 1.10 円形膜、ベッセルの方程式
 - 1.11 ラプラスの方程式、ポテンシャル
 - 1.12 球座標でのラプラスの方程式、ルジャンドルの方程式
 - 1.13 ラプラス変換の偏微分方程式への影響
2. 確率: 統計
 - 2.1 確率・統計の復習
 - 2.2 統計学的手法の概要と土木分野における利用
 - 2.3 計測データの統計学的処理
 - 2.4 最小二乗法
 - 2.5 重み付き最小二乗法
 - 2.6 条件付き最小二乗法

【教科書】

E.クライツィグ: フーリエ解析と偏微分方程式(技術者のための高等数学3)培風館

【成績の評価方法と評価項目】

試験結果とレポートを基に決める。

【留意事項】

「線形代数学」を同時に履修することが必要である。

【担当教員】

海野 隆哉

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟708号室

【授業目的及び達成目標】

地球科学的視点から災害の原因となる自然現象を知り、災害と人間社会との関わりや、ソフト・ハード両面からの防災対策について学習する。防災工学が社会に果たす役割を認識させる。

【授業キーワード】

災害, 防災, 地震, 耐震, 噴火予知, 風水害, 地滑り, 斜面, 土砂災害, 計測, 予知・予測, 人命

【授業内容及び授業方法】

プリント, OHP, 教科書を用いて講義する。

災害の種類ごとに、その発生形態, 被害状況を学習する。併せて災害予知・検知技術, 予防措置・軽減対策, 対策工法の概要について学習する。

【授業項目】

週

- 1 自然災害と防災・人間社会との関わり
- 2 地滑り(現象, 要因素因, 地形地質, 計測)
- 3 地滑り(予知・対策工)
- 4 降雨による土砂災害(斜面崩壊・土石流)と対策
- 5 降雨災害(洪水・長雨)と対策
- 6 橋梁(洗掘)災害
- 7 風害(高潮, 列車転覆), 雪害
- 8 火山災害と噴火予知
- 9 地震および地震災害の概要
- 10 地震の原因, 地震断層, 地震予知
- 11 地震動
- 12 地震被害, 早期検知, 津波・火災
- 13 耐震設計, 震害復旧
- 14 期末試験

【教科書】

「自然災害と防災」日本学術振興会

【成績の評価方法と評価項目】

期末試験により行う。記述式を主体とし、本質を理解しているか、また、実社会で応用する能力が付いているかを確認する。60点以上を合格とする。

【留意事項】

防災対策工の個々の技術分野に関する学問は取り扱わない。

連続体の力学の基礎
Basics of Continuum Mechanics

講義 2単位 2学期

【担当教員】

長井 正嗣・福嶋 祐介

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟702(長井)

【授業目的及び達成目標】

工学分野の基礎である、連続体の概念にもとづい、弾性体、流体の力学について包括的に理解し、連続体の力学の基礎方程式、解析法について学ぶ。講義は連続体の応用分野である、構造力学、水理学を念頭において進められる。

【授業キーワード】

連続体力学、流体力学、水理学、弾性体力学、構造力学

【授業内容及び授業方法】

板書を用いて講義する。

【授業項目】

- 第1週 連続体の概念、定義、その分類
- 第2週 連続体の変形と運動
- 第3週 渦度と速度ポテンシャル
- 第4週 質量の保存と連続式
- 第5週 運動量とエネルギーの保存
- 第6週 粘性流体の応力歪関係式と基礎方程式
- 第7週 完全流体の力学とベルヌイの定理
- 第8週 応力(その1)
- 第9週 応力(その2)
- 第10週 ひずみ
- 第11週 応力とひずみの関係
- 第12週 弾性方程式
- 第12週 弾性体力学の諸定理(その1)
- 第13週 弾性体力学の諸定理(その2)
- 第14週 二次元弾性問題
- 第15週 試験

【教科書】

特に指定しない。

【参考書】

テンソル・その応用: 共立出版; 石原著、
流体力学: 朝倉書店; 日野幹雄著

【成績の評価方法と評価項目】

レポート40%を期末試験を60%として成績を評価する。

【留意事項】

構造力学と流体力学を包含する連続体としての取り扱いを学ぶことによって、新たな展望を得ることができる。
鋼構造学に接続する。水理学IIを履修することが望ましい。

【担当教員】

原田 秀樹・向井 幸男

【授業目的及び達成目標】

現在深刻化している様々な地球環境問題群の概要を解説し、その全体像と相互関係を理解する。地球環境は、様々な物理過程・化学過程・生物過程の相互作用により、それ自体変動する場であるとともに、人間活動とくに産業革命以降の生産活動による擾乱を受け、変動幅は増大していると言われている。まず地球環境問題発生の際の諸要因とその構造的な特徴を最新のデータから分析し、発生メカニズムとその相互作用を体系的に把握する。さらに、地球の環境質の現状と将来を理解し、地球環境保全のための科学技術のあり方・対応を学ぶ。

【授業キーワード】

温暖化問題、オゾン層破壊問題、酸性雨問題、森林破壊、土壌破壊、砂漠化問題、海洋汚染、廃棄物、有害物質汚染問題、生物多様性の減少

【授業内容及び授業方法】

板書、OHP、パソコン(パワーポイント)を用いて講義する。毎講義時間に小テストを実施し、理解度をチェックしながら進める。

【授業項目】

- (第1週、2週)地球環境問題とは(問題提起の経緯、問題の特殊性)
- (第3週)地球環境の観測システム
- (第4週)温暖化のメカニズム
- (第5週)温暖化の観測、影響と対策
- (第6週)オゾン層破壊のメカニズム
- (第7週)オゾン層の観測、破壊の影響と対策
- (第8週)酸性雨のメカニズム
- (第9週)酸性雨の影響と対策
- (第10週)森林破壊問題
- (第11週)土壌破壊、砂漠化問題、
- (第12週)廃棄物、有害物質汚染問題、有害物質の越境問題
- (第13週)生物多様性の減少
- (第14週)海洋汚染、水質汚染、水不足
- (第15週)期末試験

【教科書】

とくに指定しない。講義に使用する図表などの資料は毎回講義時に配布する。

【参考書】

岩波講座地球惑星科学第3巻「地球環境論」、岩波書店

【成績の評価方法と評価項目】

持ち込み不可の期末試験60%、出席点30%、レポート10%により成績評価を行う。出席点は小テスト形式で毎講義時に行う。

【留意事項】

高校・高専での「物理」、「化学」、「生物」の基礎科目を理解していることを前提として講義を進める。本講義は3年2学期開講の「地球環境学2」と相互補完して地球環境問題の理解と解決方法に対する基礎的な知見を習得することを目的としているので、両科目の履修が望ましい。

【担当教員】

松本 昌二・原田 秀樹

【授業目的及び達成目標】

本講義は二部構成になっている。第1部(原田担当)では、さまざまな地球環境問題群を貫く諸要因としての社会的・経済的問題を解説する。具体的には、人口問題、資源・エネルギー問題、食糧・農業システム問題などの最新データを解析しながら、地球環境問題の社会・経済的構造を包括的に理解する。第2部(松本担当)では、それら地球環境問題を軽減する対策について、環境政策および環境経済学的アプローチを講述する。具体的には、環境政策手段としての直接規制と間接規制(経済的手段)の方法の理論的背景を修得し、さらに地球温暖化防止政策について国際的動向を理解する。

【授業キーワード】

人口問題、資源・エネルギー問題、食糧・農業システム問題、環境経済学的アプローチ、環境政策、国際協調

【授業内容及び授業方法】

板書、OHP、パソコン(パワーポイント)を用いて講義する。毎講義時間に小テストを実施し、理解度をチェックしながら進める。レポートは数回課し、資料の解析能力、応用思考力を涵養する。

【授業項目】

第1部(第1週から8週まで原田担当)
(第1週、2週)社会・経済問題としての地球環境問題の系譜
(第3週)人口問題の数学的表現と世界人口の推移・将来予測
(第4週)人口問題の視点、人口問題への対応と課題
(第5週)食糧問題の過去・現在・将来と対応と課題
(第6週)農業システムの過去・現在・将来と対応と課題
(第7週)エネルギー問題の過去・現在・将来と対応と課題
(第8週)資源問題の過去・現在・将来と対応と課題

第2部(第9週から14週まで松本担当)
(第9週)地球温暖化の社会経済問題:日本のエネルギー需給
(第10週)地球温暖化防止京都会議と日本政府の対策
(第11週)CO2排出削減の技術的方策(自然エネルギー、省エネルギー、CO2吸収など)
(第12週)温暖化対策の経済的措置(炭素税、補助金など)
(第13週)温暖化対策の国際的取り組み(排出量取引、共同実施など)
(第14週)自治体、家庭の温暖化対策
(第15週)期末試験

【教科書】

原田担当分=とくに指定しない。講義に使用する図表などの資料は毎回講義時に配布する。
松本担当分=佐和隆光「地球温暖化を防ぐー20世紀型経済システムの転換ー」岩波新書

【成績の評価方法と評価項目】

成績評価の方法と基準
持ち込み不可の期末試験60%、出席点20%、レポート20%により成績評価を行う。出席点は小テスト形式で毎講義時に行う。

【留意事項】

本講義は、1学期開講の「地球環境学1」と相互補完して地球環境問題の理解と解決方法に関する基礎的な知見を習得することを目的として開講されているので、両科目の履修が望ましい。

【担当教員】

福嶋 祐介・細山田 得三・陸 旻皎

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟804,807
環境棟653

【授業目的及び達成目標】

今後想定される様々なコンピュータ利用のための基礎を学ぶとともに、コンピュータを用いた問題解決の手段を、実習をしながら習得する。

【授業キーワード】

情報処理技術、情報ネットワーク技術、コンピュータ利用、プログラミング言語

【授業内容及び授業方法】

コンピュータ基礎の学習、ネットワーク利用実習、アプリケーションソフトウェアを用いた実習、数値計算のためのプログラミングの基礎の実習。

【授業項目】

1. ガイダンス(1週)
2. コンピュータの構成と働きに関する基礎(講義1週)
3. 実習機器の使用法とUNIXの基礎実習(実習1週)
4. ネットワークに関する基礎とルール(講義1週)
5. 電子メール送受信実習、WWWによる情報検索実習(実習1週)
6. ワードプロセッサ、表計算ソフトの利用実習(実習3週)
7. FORTRANまたはCを用いたプログラミング言語文法の習得とプログラミングの基礎実習(実習5週)

【教科書】

必要があれば実習時に指示する。

【参考書】

基本情報処理技術者試験程度の内容のテキスト、UNIXの基礎解説書、FORTRANまたはCの基礎文法解説書など。

【成績の評価方法と評価項目】

全実習時間の出席を要求する。詳細な評価基準は各実習毎に提示する。

【留意事項】

コンピュータを利用する機会を各自で増やすことが望ましい。
環境・建設計算機実習II(3年2学期)を履修する者は、本実習を履修することが望ましい。

【参照ホームページアドレス】

<http://globe.nagaokaut.ac.jp/~kumakura/>

【担当教員】

大塚 悟・大橋 晶良・陸 旻皎・岩崎 英治

【教員室または連絡先】

環境システム棟569・機械建設1号棟710

【授業目的及び達成目標】

様々な分野での今後のコンピュータ利用のための応用知識を学び、実習により計算機を用いた問題解決法を習得する。

【授業キーワード】

情報処理技術, コンピュータ利用, プログラミング言語, 汎用ソフトウェアの利用

【授業内容及び授業方法】

学生のニーズに応じたコンピューター技術の向上を目的に, C言語及びFORTRAN言語のプログラミング言語の基礎と応用, 並びに汎用アプリケーションソフトウェアを用いた各種データ処理の3コースを設定して講義並びに実習を行なう。プログラミング言語のコースでは学生のレベルに応じて中級・上級コースを設定する。

【授業項目】

1週. ガイダンス

2-15週. 各コースにおける講義・実習

各コースの授業項目は

Aコース: アプリケーションソフトによるデータ処理技術

表計算ソフトEXCELを用いて各種のコンピュータ処理の実際を学ぶ。簡単なデータ・統計処理(平均値と分散、最小自乗法), 回帰分析, 数値積分。ワープロの利用法についても学ぶ。

Bコース: FORTRAN言語によるプログラミング

FORTRANによるプログラミングの演習統計計算, ソーティング, 数値補間, 数値積分, 常微分方程式, 連立方程式

上級コースを選択する学生には個別にテーマを与える。

Cコース: C言語によるプログラミング

ソーティング, マトリックス演算(連立方程式, 固有値), 数値補間(スプライン関数), 数値微積分(常微分方程式, 偏微分方程式)

上級コースを選択する学生には個別にテーマを与える。

【教科書】

特には指定しない。必要であれば実習時に指示する。

【参考書】

FORTRANまたはCの基礎文法解説書

【成績の評価方法と評価項目】

全実習時間の出席を要求する。詳細な評価基準は各実習毎に提示する。

【留意事項】

環境・建設計算機実習Iを受講しておくこと。

【担当教員】

大塚 悟・下村 匠

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟801・703室

【授業目的及び達成目標】

建設工学各分野の共通問題である構造物の応力解析について、基礎となる数学原理から、数値解析手法への適用、実際の工学的問題の解析までを系統的に講義することにより、数値解析を単なるブラックボックスではなく原理を理解しながら適用できる建設技術者を志向することを目的とする

【授業キーワード】

構造解析, 数値解析, 応力解析, 線形代数, トラス構造, 弾性問題, 有限要素解析, 線形破壊力学

【授業内容及び授業方法】

前半では線形代数の基礎とその力学における役割について、後半では弾性問題の有限要素解析、線形破壊力学の基礎について取り扱う。講義形式いづれも、講義及び演習とし、前半・後半ごとに試験を行う。

【授業項目】

前半(8回):

- (1)ベクトルと行列, 体積と行列式, 逆行列
- (2)連立一次方程式の解法
- (3)座標変換, 固有値, 不変量
- (4)線形代数とトラス構造の力学
- (5)試験

後半(7回):

- (5)弾性問題の基礎方程式
- (6)弾性問題の有限要素解析
- (7)離散定式化と数値解析プログラム
- (8)具体的問題の数値シミュレーション
- (9)線形破壊力学の基礎, クラックの数学的取り扱い
- (10)建設分野における線形破壊力学の工学的応用
- (11)試験

【教科書】

特に指定しない。

【参考書】

田村武著「線形代数(テキストシリーズ, 土木工学6)」(共立出版)

【成績の評価方法と評価項目】

課題レポート(20%), 試験(80%)により成績評価を行う。

【担当教員】

宮木 康幸

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟709

【授業目的及び達成目標】

土木構造物には、地震や風、交通荷重などの外乱が作用するため、構造物の振動が問題となることが多い。

そこで、構造物の振動に関する基礎を修得することを目的として、

- (1) 基本となる1自由度系の自由振動及び強制振動について理解し、手計算レベルでの計算能力を修得すること。
- (2) 多自由度系の振動への発展を目指して、2自由度系を対象とした自由振動及び強制振動について理解し、手計算レベルでの計算能力を修得すること。
- (3) 分布質量系の振動の代表として、はりの曲げ振動について理解すること。
- (4) 自由振

【授業キーワード】

動力学、力学一般、構造解析、1自由度系、2自由度系、動吸振器、振動形解析法、はりの曲げ振動、自由振動の近似解法、FFT分析

【授業内容及び授業方法】

板書、配布資料を用いて講義する。

4～5回程度、計算問題のレポートを課し、講義内容の理解と計算能力を補強する。

【授業項目】

- 第1週 序説
- 第2週 1自由度系の振動(1)自由振動と減衰自由振動
- 第3週 1自由度系の振動(2)強制定常振動
- 第4週 1自由度系の振動(3)強制変位振動
- 第5週 1自由度系の振動(4)強制過渡振動
- 第6週 2自由度系の振動(1)自由振動と減衰自由振動
- 第7週 2自由度系の振動(2)強制振動－2質点系としての解法－
- 第8週 2自由度系の振動(3)一般座標・一般力・散逸関数、ラグランジュの運動方程式
- 第9週 2自由度系の振動(4)強制振動－振動形解析法－
- 第10週 はりの曲げ振動(1)ベルヌーイ・オイラーはり
- 第11週 はりの曲げ振動(2)チモシェンコはり
- 第12週 一次元分布質量系の自由振動の近似解法(1)レイリーの方法
- 第13週 一次元分布質量系の自由振動の近似解法(2)リッツの方法
- 第14週 FFT分析、有限要素法による振動解析の基礎
- 第15週 期末試験

【教科書】

特に指定しない。2～3回程度の講義内容をまとめた資料を授業の始めに配布する。

【参考書】

小坪清真著:「入門建設振動学」(森北出版)

【成績の評価方法と評価項目】

期末試験70%、出席点10%、レポート20%により成績評価を行う。

なお、出席点は、授業始めの点呼に遅れた場合には遅刻として半減する。

期末試験は、主として計算能力を問う問題を出題し、配布資料・ノート持込み可、計算機持込み可で行う。

【担当教員】

宮木 康幸・高橋 修・細山田 得三・下村 匠・豊田 浩史

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟709・807・703・705室

【授業目的及び達成目標】

日本語技術報文の作成演習を通じて、

- (1) 技術・研究成果を文書により適切に伝達する能力を養う
- (2) 報文作成の基礎となる論理的思考力を養う
- (3) 文章表現に注意を払い、以降、自律的に正しい文章を心がける習慣を身につけることを目的とする。

【授業キーワード】

技術報文, 学術論文, レポート, データ整理, 論理的思考力, 情報伝達

【授業内容及び授業方法】

4人の教官が順次担当する。各教官、講義形式によるテーマの説明の後、宿題を課し、宿題採点后、批評を行う。

【授業項目】

- ・報文作成の基本事項に関する講義(3回)
- ・正しい日本語で誤解がない文章を作成する演習(3回)
- ・データをもとに報文を作成する演習(3回)
- ・論理的な文章を作成する演習(3回)
- ・学術論文のフォーマットにしたがい論文を作成する演習(3回)

【教科書】

特に指定しない。

【参考書】

木下是雄:「理科系の作文技術」中公新書
など、報文作成の方法論に関する図書を持つておくことが望ましい。

【成績の評価方法と評価項目】

出席(20%), レポート(80%)により成績評価を行う。

【留意事項】

選択科目であるが、全員受講することを勧める。

【担当教員】

全教官

【授業目的及び達成目標】

教官より問題提議される建設工学における特定テーマの探求を通じて、

- (1) 当該テーマに関する工学的興味と専門的知識を深めること
 - (2) 工学的問題意識を持ち、自律的に問題解決に取り組む能力を身につけること
 - (3) 建設技術者としての広い視野を身につけること
 - (4) 技術を通じて社会に貢献する自覚と責任と喜びを理解すること
- を目的とする。

【授業キーワード】

建設工学, 土木工学, 社会基盤工学, 自己学習, 技術者倫理

【授業内容及び授業方法】

初回の講義においてガイダンスを行い、複数の教官よりテーマが提示される。教官ごとに受容できる学生数を提示し、概ね各テーマに5～10人となるように、学生の希望を優先してグループ分けを行う。その後は、グループごとに担当教官の指示に従い演習を行う。

【授業項目】

各教官により、毎年異なったテーマが提示される。過去の実績、最新の研究成果、社会情勢をふまえ、学生が興味を持って取り組めるよう工夫された、建設工学、環境システム工学に含まれる適切なレベルの調査・研究テーマがいくつか提示される。

【教科書】

担当教官ごとに内容が異なるためここでは特に指定しない。

【参考書】

担当教官ごとに内容が異なるためここでは特に指定しない。

【成績の評価方法と評価項目】

セミナーに出席して課題に取り組むことと、宿題やレポート等の提出物の成果により成績評価を行う。

【留意事項】

「環境テーマセミナー」と合同開講する。建設工学課程の学生が環境システム工学の教官が提示するテーマを選択すること、環境システム工学課程の学生が建設工学の教官が提示するテーマを選択することが可能である。

構造解析学I

Structural Analysis 1

講義 2単位 1学期

【担当教員】

岩崎 英治

【教員室または連絡先】

機械・建設1号棟803

【授業目的及び達成目標】

前半では、土木工学の基礎であり、高専や学部2年で習得した応用力学の復習を行う。また、後半では、コンピュータや数値計算法の発展と共に、開発された有限要素法やマトリックス構造解析法の基礎であるエネルギー原理とそれに基づいた近似解法について講義し、4年次および大学院の講義の基礎学力を習得する。

【授業キーワード】

構造解析学, 力学一般

【授業内容及び授業方法】

板書, プリント, OHPを用いて講義する。講義の後には, 演習問題を課す。

【授業項目】

- 第1週 反力, 断面力, 影響線の復習 (はり, トラス)
- 第2週 断面定数, 曲げ応力, せん断応力の復習
- 第3週 たわみの計算の復習 (微分方程式, モールの定理)
- 第4週 不静定構造の解法の復習 (変位の適合条件, 静定基本系)
- 第5週 仕事とひずみエネルギー
- 第6週 固体力学におけるエネルギー原理
- 第7週 変位法に基づいたエネルギー原理
- 第8週 応力法に基づいたエネルギー原理
- 第9週 弾性安定問題
- 第10週 線形座屈解析
- 第11週 線形弾性解析に適用できるエネルギー原理I
- 第12週 線形弾性解析に適用できるエネルギー原理II
- 第13週 変分法とエネルギー原理
- 第14週 変分法に基づいた近似解法
- 第15週 期末試験

【教科書】

なし

【参考書】

なし

【成績の評価方法と評価項目】

演習レポート(20%), 中間試験(40%), 期末試験(40%)により成績評価を行う。

【留意事項】

本科目は、「構造解析学II」に継続, 発展する。

【担当教員】

福嶋 祐介

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟804

【授業目的及び達成目標】

河川、海岸、海洋など、土木工学に関わる水の流れについて、その現象と解析法について学ぶ。水理学は流体力学と経験的な学問とが互いに補完し合う学問である。本科目は水理学を既習した学生を対象として、(1)完全流体と粘性流体の基礎方程式、(2)管路、開水路における定常流の解析法、(3)管路、開水路における非定常流の解析法、(4)次元解析と相似則、模型実験、を理解することを目標とする。

【授業キーワード】

水理学、流体力学、開水路の流れ、管路の流れ、模型実験と相似則、河川、海岸

【授業内容及び授業方法】

板書を用いて講義する。

【授業項目】

1. 流体運動の基礎理論(流体運動の記述、流体運動の変形とひずみ、連続の方程式、完全流体の運動方程式、ポテンシャル流れとベルヌイの定理)(2週)
2. 粘性流体の力学(応力と運動方程式、ナビエ・ストークス方程式、流れの分類と境界条件、乱流の流れ)(3週)
3. 管路流の定常流れ(平均流速公式、管路の摩擦損失係数、摩擦以外のエネルギー損失、管路の定常流れの計算、管路網など)(2週)
4. 開水路の定常流れ(摩擦を考慮したベルヌイの式、流れの分類、平均流速公式、層流の流速分布と抵抗則、乱流の流速分布と抵抗則、不等流の水面形方程式)(3週)
5. 管路・開水路の非定常流れ(二つの水槽間の振動、サージング、基礎方程式、段波、洪水流解析)(3週)
6. 次元解析と模型実験の相似則(1週)
7. 期末試験(1週)

【教科書】

「水工学の基礎と応用」早川典生著、彰国社

【参考書】

「明解水理学」日野幹雄著、丸善

【成績の評価方法と評価項目】

中間試験50%、期末試験50%により成績評価を行う。中間試験、期末試験では、理解度を問う問題を出題する。

【留意事項】

本科目では、水理学の基礎を学ぶことを主眼とするが、それに加えて、応用水理学、海岸海洋工学、建設工学実験IIの水工学分へ発展される。

【担当教員】

豊田 浩史

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟705室

【授業目的及び達成目標】

土質力学の基礎(せん断破壊まで)について、単なる知識だけでなく理論的背景も学びながら、時間の許す範囲で深く掘り下げていく。土の基本的挙動を系統的に理解できるようにし、応用問題や実務問題にも十分適用できるだけ能力が身につくように努める。

1. 土の状態の表し方を理解し、土を適切に分類することができる。
2. 土の締固め特性を理解し、実務においても密度と間隙比の管理を行うことができる。
3. 有効応力の原理を理解し、地盤内応力を正しく評価できる。
4. 透水と圧密問題における仮定の違いおよびその理論を理解する。
5. 地盤の透水量や水頭分布を計算できる(フローネット)。
6. 圧密時間と圧密量(沈下量)を計算できる(一次元圧密理論、有限差分法)。
7. 応力とひずみの表記法について学び、せん断時の応力径路と土の破壊規準について理解する。

【授業キーワード】

土質力学, 力学一般, 透水, 圧密, 破壊規準

【授業内容及び授業方法】

基本的に板書により講義を進め、応用的な問題に関してはプロジェクターを使用する。理解を助けるための資料として、プリント等をその都度配布する。各種理論式の誘導や計算問題については宿題を課し、その使用方法について理解が深められるようにする。

【授業項目】

1. 土の組成 (1週)
土の成因, 特殊土, 粘土鉱物とその構造
2. 土の物理指標 (2週)
土の物理量, コンシステンシー, 分類法, 締固め
3. 地盤内応力 (2週)
有効応力, 土被り圧, 応力伝播問題
4. 透水の基礎理論 (1週)
BernoulliとDarcyの法則, 透水試験, Laplaceの方程式
5. 透水の応用問題 (2週)
図式解法, Dupuitの仮定と境界値問題, 透水力
6. 圧密の基礎理論 (2週)
基本指標, 圧密試験, 一次元圧密方程式とその解法
7. 圧密の応用問題 (2週)
沈下量の計算, 二次圧密, 有限差分法
8. せん断特性 (2週)
応力とひずみ, モールの円, 破壊規準, 土の力学特性
9. 期末テスト (1週)

【参考書】

杉本光隆, 河邑眞, 佐藤勝久, 土居正信, 豊田浩史, 吉村優治:「土の力学」(朝倉書店)
河上房義:「土質力学」(森北出版)

【成績の評価方法と評価項目】

レポートおよび平常点30%, 期末試験70%により成績評価を行う。レポートでは理論式の展開と計算問題を、期末試験では理論を応用問題に適用できるかを問う。期末試験では筆記用具以外持込み不可とする。

【留意事項】

講義では、基礎的項目から取り上げていくが、ある程度土質力学に関する基礎知識を有している方が望ましい。本科目は地盤工学IIに接続しており、地盤工学IとIIで土質力学全般をカバーすることになる。

【担当教員】

鳥居 邦夫・大森 邦雄

【教員室または連絡先】

706 内線 9606
メールアドレス:willy@nagaokaut.ac.jp

【授業目的及び達成目標】

構造物の応力解析法を修得させる。

【授業キーワード】

応用力学 変分法 ハミルトンの原理 Lagrangeの運動方程式

【授業内容及び授業方法】

構造物の応力解析を通常の釣合方程式と、適合条件式を用いて行なうのではなく、エネルギーの変分方程式から出発する方法で行なう。そのためには変分法をじゅうぶんに理解することが必要であり、授業の半分をこれに割いている。
こうすることにより、静止力学と動力学が別物ではなく、全く同じ考え方に立っていることを理解させる。また難解とされるラグランジュの方程式の明確な解釈ができることを明らかにする。

【授業項目】

- 1)変分法の概要
- 2)変分法を用いた固有値問題の意味付け
- 3)構造物の動的解析
- 4)構造物の不安定解析

【参考書】

材料力学と変分法 ブレイン図書 著者:C.L.Dym

【成績の評価方法と評価項目】

出席点 50
テスト 50

【留意事項】

本講義を受講するには応用力学に関するかなり高度な知識が必要である。本学で用意されている応用力学の講義を合せて受講することが望ましい。

【参照ホームページアドレス】

<http://sekkei-svr.nagaokaut.ac.jp/jyugyou/H13hennbunn/index.htm>
建設設計研究室

【担当教員】

中出 文平

【教員室または連絡先】

環境システム棟3F中出教官室

【授業目的及び達成目標】

都市の現状・課題と都市形成の歴史について概論した上で、都市計画の意義、内容についての基本的な考え方を学習する。

【授業キーワード】

都市の抱える課題、都市形成、都市類型、都市計画制度

【授業内容及び授業方法】

自分の出身都市等の課題の抽出、問題点の改善の提案、都市問題に関する自己の考えの表明等、小演習をたびたび行ない、都市計画への理解を深める。

【授業項目】

- 1.序
((1)都市計画とは (2)都市計画が直面した課題の変遷 (3)現代都市の抱える課題と都市計画の対応)
- 2.都市形成の歴史
((1)古代、中世 (2)産業革命以降 (3)日本の都市形成)
- 3.多様な都市の存在と計画課題
((1)現代都市の都市化の諸面と多様な都市の存在 (2)都市類型の視点と計画課題)
- 4.計画の体系 ((1)基本概念と都市計画の内容 (2)都市計画制度と地域地区 (3)都市施設と市街地開発事業 (4)地区計画制度)

【教科書】

都市計画 第3版 日笠端・日端康雄著 共立出版(株)

【参考書】

都市計画教科書 第2版 都市計画教育研究会編 彰国社

【成績の評価方法と評価項目】

毎週の講義における小レポートの内容をもって出席点とするとともに、最終日に試験を行なう。

【留意事項】

1学期において都市及び都市計画の基礎を学び、2学期の都市の計画にける応用へと発展継続する。なお、都市交通については、別途交通計画学で学ぶ。

【参照ホームページアドレス】

<http://urban.nagaokaut.ac.jp/~plan>
都市計画研究室

【担当教員】

原 信一郎

【教員室または連絡先】

環境棟267号室

【授業目的及び達成目標】

線形代数学は、微積分学と並んですべての工学における数学的な分析方法の重要な基礎の一つである。本講義では既に行列・行列式の計算や、連立一次方程式の解法などを学んであることを前提として、様々な現象の中に潜む線形的な現象を捉えるための最も基本的な枠組みを与える。

【授業キーワード】

線形代数学

【授業内容及び授業方法】

簡単な基礎知識について復習した後、以下の項目に沿って講義し、適宜演習も行う。

【授業項目】

- 第1週 行列式
- 第2週 行列式の基本性質
- 第3週 行列式の展開
- 第4週 逆行列
- 第5週 n 次元ベクトル空間
- 第6週 1次従属と1次独立
- 第7週 正規直交系
- 第8週 部分空間
- 第9週 行列の階数
- 第10週 線形写像
- 第11週 直交変換
- 第12週 固有値と固有ベクトル
- 第13週 対称行列の対角化
- 第14週 2次形式
- 第15週 線形微分方程式

【教科書】

線形代数学の標準的な教科書を指定する。

【成績の評価方法と評価項目】

期末試験のみを行う。評価は、1.任意の大きさの行列式の計算、2.逆行列の計算、3.行列の階数の計算、4.連立1次方程式の解法、5.ベクトル空間の基底の計算、6.線形写像の行列表現、7.固有値、固有ベクトルの計算、8.2次式の標準形の計算、などの項目について見る。

【参照ホームページアドレス】

<http://blade.nagaokaut.ac.jp/~hara/>
授業関連ページ

【担当教員】

長井 正嗣

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟702

【授業目的及び達成目標】

鋼構造の設計に関わる事項を習得する。鋼の性質、強度、荷重とその制御対策、接合法を習得する。とくに、柱、梁、板の座屈解析法と安定照査方法を習得し、座屈を防止するための断面の設計法を習得する。

【授業キーワード】

鋼構造、橋梁、柱、梁、板、座屈、設計

【授業内容及び授業方法】

板書、ビデオ、OHP、プリントを用いて講義する。

【授業項目】

- 第1週 鋼構造物の実際
- 第2週 鋼構造物のライフサイクル
- 第3週 鋼の製造、性質及び構造物設計法
- 第4週 風、地震荷重とその対策
- 第5週 振動制御理論と対策
- 第6週 接合設計法
- 第7週 柱の弾性座屈基礎方程式
- 第8週 柱の弾性座屈解析(直接法とエネルギー法)
- 第9週 柱の非弾性座屈解析と設計
- 第10週 梁の横ねじれ座屈解析と設計
- 第11週 平板の曲げ基礎方程式
- 第12週 平板の曲げ解析
- 第13週 平板の弾性座屈基礎方程式
- 第14週 平板の弾性座屈解析(級数解とエネルギー法)
- 第15週 補剛板の弾性座屈解析と設計

【教科書】

長井正嗣著「橋梁工学」、共立出版(株)

【成績の評価方法と評価項目】

期末試験(80%)、レポート(20%)

【留意事項】

なし

【担当教員】

福嶋 祐介

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟804

【授業目的及び達成目標】

主として河川工学に関連する内容を中心に、洪水流解析の手法、実際の河川における乱流、二次流、湾曲部における流れ、河川における土砂流である掃流砂、浮遊砂などの取り扱い、地下水の流れ、降雨と河川への流出現象などを学ぶ。

【授業キーワード】

水理学、流体力学、河川工学、水文学

【授業内容及び授業方法】

板書を用いて講義する。

【授業項目】

1. 洪水流の解析(運動波解析、拡散波解析、力学波解析、特性曲線法、洪水流の数値解析法)(3週)
 2. 流れの3次元性と大規模渦(二次流、蛇行水路における流れ、複断面水路の流れ、開水路流れにおける大規模渦)(2週)
 3. 流砂と河川形態(砂の運動と限界掃流力、掃流砂量、浮遊砂量、河床と流路の形態)(3週)
 4. 地下水の流れ(飽和帯の流れの基礎式、ポテンシャル理論を用いた解析、準一様流の仮定と不圧地下水)(2週)
 5. 河口、貯水池での密度流(河口密度流、貯水池密度流)(1週)
 6. 河川水文学(降雨の特性と流出、流出解析、合理式と単位図法、貯留関数法とタンクモデル)(2週)
- 期末試験

【教科書】

「水理学2」玉井信行著、培風館

【参考書】

「水工学の基礎と応用」早川典生著、彰国社
「明解水理学」日野幹雄著、丸善

【成績の評価方法と評価項目】

期末試験により成績評価を行う。

【留意事項】

この科目は水理学I、IIの応用編であり、水理学の知識があることを前提として講義が行われる。

【担当教員】

大塚 悟

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟801

【授業目的及び達成目標】

土の基本的な力学的性質を理解して、設計における地盤の理想化・単純化について学ぶことを目的とする。また地盤に特有な施工法である観測的設計法に着いても理解を深める。

【授業キーワード】

有効応力, 圧密, せん断, 安定解析, 設計, 観測的施工法

【授業内容及び授業方法】

講義は2段階から成る。

はじめに、土のせん断特性を粘性土と砂質土について大別して説明し、荷重下の地盤挙動を知る上で必要な基礎知識の理解を深める。特に、排水条件によって異なる地盤挙動の変化を有効応力原理に基づいて理解することを目的とする。次に、擁壁などに作用する土圧や地盤の支持力、並びに斜面安定などの実際問題についてその力学機構と解析法について講義を行う。

設計に必要な地盤定数の考え方について理解を深める事を目的とする。事前設計並びに施工中の観測を用いた破壊予測と設計へのフィードバックシステムについて講義する。

【授業項目】

- 1週: ガイダンス
- 2週: 有効応力と圧密
- 3週: 沈下予測の方法(観測的方法)
- 4週: 応力と応力の不変量
- 5週: 土の破壊基準
- 6週: 土の室内せん断試験
- 7週: 土の非排水・排水試験
- 8週: 有効応力経路と限界状態モデル
- 9週: 盛土の設計と土質定数
- 10週: $\phi = 0$ 安定解析と破壊予測法
- 11週: 地盤の土圧
- 12週: 斜面安定解析
- 13週: 地盤の支持力
- 14週: 予備日
- 15週: 期末試験

【教科書】

特に指定しない。

【参考書】

山口 柏樹: 土質力学, 技法堂出版
岡 二三生: 土質力学演習, 森北出版

【成績の評価方法と評価項目】

出席及びレポート, 期末試験

【留意事項】

受講者は「地盤工学I」を受講することが不可欠である。

【担当教員】

海野 隆哉

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟708号室

【授業目的及び達成目標】

基礎を初めとする地盤関連構造物の設計方法を理解し、実際に計算してみて、体得する。地盤関連構造物の設計においても、現在はほとんどプログラム化され、設計手法・理論的背景を知らずに入力し、結果を利用するというケースが少なくない。そのため、しばしば事故を起こしている。本授業は、この問題点を解決しようとするもので、設計手法の理論的・学問的背景や載荷試験等による構造物と地盤の相互作用の実態についても、同時に理解させることを目的としている。また、基礎等の計画に当たって必要な地盤調査についても触れている。

【授業キーワード】

地盤工学, 基礎, 設計論, 地盤調査, 支持力, 杭基礎, 掘削土留め工, グラウンドアンカー

【授業内容及び授業方法】

教科書, プリント, OHP等を用いて講義する。
地盤関連構造物の種類毎に、施工方法の概要, 地盤と基礎構造物の相互作用・基礎的理論, 設計方法, 設計に必要な地盤定数の取得方法について学習し, 併せて, 実社会に出ると, 直ちに必要となることの多い基礎の鉛直支持力, 杭基礎・掘削土留め工・グラウンドアンカーの設計方法については, 計算演習(宿題)を通じて, 具体的に理解させる。

【授業項目】

- 第1週 基礎構造概論(機能, 種類, 分類)
- 第2週 踏査, 概略地盤調査
- 第3週 詳細地盤調査, 設計目的に対応した調査項目の選定
- 第4週 直接基礎・支持力理論
- 第5週 杭の種類・施工法, 単杭の鉛直支持力(支持力理論)
- 第6週 単杭の鉛直支持力(実験式, ネガティブフリクション, 杭打ち公式)
- 第7週 単杭の水平支持力(理論式)
- 第8週 単杭の水平支持力(実験データ), 杭基礎の設計方法
- 第9週 掘削土留め工(機能, 種類, 各種土留め壁の施工方法)
- 第10週 土留め壁の設計(測定例, 土圧側圧の考え方, 根入れ長の算定)
- 第11週 掘削底面の安定, 土留め壁・支保工に作用する断面力の算定
- 第12週 グラウンドアンカー(機能, 測定例, 支持理論, 設計法)
- 第13週 地下構造物・トンネル(機能, 種類, 設計の考え方)
- 第14週 ケーソン・鋼管矢板・連壁剛体基礎(機能, 種類, 設計の考え方)
- 第15週 基礎の支持力, 杭基礎, 掘削土留め工, グラウンドアンカーの設計計算演習(宿題)の解説

【教科書】

「地盤工学」コロナ社

【参考書】

「土質力学」技報堂出版, 「杭基礎の設計法とその解説」地盤工学会, 「グラウンドアンカー工法の調査・設計から施工まで」地盤工学会

【成績の評価方法と評価項目】

小テストおよび上記4種類の構造物の設計計算演習(1人当たり総解答枚数20~30枚)を採点し, 生み点及び出席点が60点以上を合格とする。なお, 丸写しを避けるため, 杭基礎及び掘削土留め工の演習問題については, 一人一人設計条件を変えている。

【留意事項】

構造力学, 土質力学, コンクリート工学, 鋼構造学の初歩について理解していることが望ましい。
構造部材については, 作用外力を求めるまでで, 部材設計は行わない。

【担当教員】

丸山 暉彦

【教員室または連絡先】

707

【授業目的及び達成目標】

道路の線形設計に必要な交通流理論などの基礎知識を習得する。

【授業キーワード】

交通流、交通容量、道路の幾何構造、線形設計、交差点設計、空港設計、騒音、振動、大気汚染、交通事故、ITS

【授業内容及び授業方法】

道路は、山を越え谷を越え、どこにでも到達できるよう、地上のあらゆるところに張りめぐらされているが、その幅、車線数、勾配、曲線半径などは、綿密な理論に基づいて設計されている。

とくに渋滞や信号制御などに関係のある、自動車交通流に関する理論について詳しく講義する。また、自動車の総重量、登坂能力、最小回転半径なども重要な要素である。

さらに空港の滑走路やエプロンの設計法についても触れる。
実際の施設計画・建設に役立つよう実際の設計例を用いて学習する。

【授業項目】

1. 交通の歴史、道路の種類
2. 交通流(1)理論
3. 交通流(2)速度、密度、交通量の関係
4. 道路の設計に必要な交通特性、交通容量
5. 自動車の緒元、道路の設計寿命
6. 道路の線形設計(1)平面線形
7. 道路の線形設計(2)縦断線形
8. 交差点設計
9. 空港設計(1)滑走路
10. 空港設計(2)エプロン
11. 交通環境(1)騒音評価方法、対策
12. 交通環境(2)振動、大気汚染
13. 交通事故と安全対策
14. 未来の交通—ITS

【教科書】

元田良孝他「交通工学」森北出版

【成績の評価方法と評価項目】

授業の進行状況に応じてレポートを課し、中間試験および期末試験を実施する。

【留意事項】

建設工学の基礎科目すなわち応用力学、地盤工学、水理学、建設材料学等の知識を駆使する応用工学である。これらの基礎科目を確実に学習しておかねばならない。

【担当教員】

丸山 久一・下村 匠

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟701・703

【授業目的及び達成目標】

社会基盤施設を形成する代表的な構造形式である、鉄筋コンクリート構造、プレストレストコンクリート構造について、

- (1) 変形・破壊に関する力学的性質の基本を理解すること、
 - (2) それら力学的挙動に関する手計算レベルの数学モデルの仮定を理解し、計算能力を修得すること、
 - (3) 構造物の設計の意義を理解し、コンクリート標準示方書[設計編]に則った設計方法を運用できるようになること、
- を目標とする。

【授業キーワード】

鋼材、コンクリート、複合材料、力学一般、構造解析、設計論、コンクリート構造、複合構造

【授業内容及び授業方法】

板書、プリント、OHPを用いて講義する。各種計算方法の講義の後には、計算問題の宿題を課し、仮定の理解と計算能力を補強する。

【授業項目】

- 第1週 線形材料・非線形材料を用いた棒材の力学の復習
- 第2週 コンクリートと鋼材の力学的性質
- 第3週 鉄筋コンクリート棒部材の曲げ性状
- 第4週 鉄筋コンクリート棒部材の曲げ挙動の計算仮定
- 第5週 鉄筋コンクリート棒部材の曲げ耐力(曲げ引張破壊)
- 第6週 鉄筋コンクリート棒部材の曲げ耐力(つりあい鉄筋比と等価応力ブロック)
- 第7週 小テスト・鉄筋コンクリート棒部材の曲げ挙動の計算プログラム作成の出題
- 第8週 プレストレストコンクリート構造の原理
- 第9週 プレストレストコンクリート構造の曲げ挙動の計算
- 第10週 鉄筋コンクリート部材のせん断破壊現象
- 第11週 鉄筋コンクリート棒部材のせん断耐力算定法
- 第12週 ひび割れ幅算定法とひび割れ幅照査
- 第13週 限界状態設計法の概念と各種安全係数
- 第14週 鉄筋コンクリート構造の耐震設計
- 第15週 期末試験

【教科書】

岡村 甫、前田詔一 著:「鉄筋コンクリート工学」(市ヶ谷書店)

【参考書】

吉川弘道著:「鉄筋コンクリートの設計—限界状態設計法と許容応力度設計法」(丸善)

【成績の評価方法及び評価項目】

レポート10%、小テスト10%、期末試験80%により成績評価を行う。
期末試験では、主として計算能力を問う問題を出題する。
自筆のA4メモ(試験後に提出)、計算機を持ち込みを可とする。

【留意事項】

本科目では、鉄筋コンクリート構造の力学的な側面をカバーし、4年1学期の「コンクリート材料学」では耐久性と施工に関する事項を講義する。両者はともに、4年2学期の「建設設計製図II」のコンクリート構造物の設計課題に取り組む際の基礎となる。

【担当教員】

小林 昇治

【教員室または連絡先】

環境棟2F268号室

【授業目的及び達成目標】

理工学において応用上きわめて重要な微分方程式の解法と理論の初歩および要点を解説し、併せて数学の考え方の一端にも触れさせる。

【授業キーワード】

微分方程式

【授業内容及び授業方法】

基本的な重要事項を解説し、例題の模範解答を与える。教科書以外の話題や例題を扱うこともある。微分方程式の解き方を単に紹介するだけでなく、解法を導き出す過程とその思考法に触れさせる。

【授業項目】

1. 序論
- 1.1 微分方程式とは 1.2 分類 1.3 解の分類
2. 求積法
- 2.1 基本定理 2.2 変数分離形 2.3 同次形 2.4 1階線形 2.5 完全微分形
3. 解の存在
- 3.1 近似解 3.2 逐次代入法 3.3 解の存在定理 3.4 解の一意性
4. 線形微分方程式
- 4.1 基本定理 4.2 解の独立 4.3 基本解 4.4 定数係数線形微分方程式

【教科書】

「常微分方程式要論」小林昇治著、近代科学社。

【成績の評価方法と評価項目】

原則として学期中に2回の試験を行う。評価基準はほぼ50%づつ。

【留意事項】

1年次または高専(短大)において微分積分学と線形代数学の初歩を学んでいることを前提とする。線形代数学を併せて履修することが望ましい。

【担当教員】

佐野 可寸志・松本 昌二

【教員室または連絡先】

環境棟3F365号室

【授業目的及び達成目標】

都市交通を主体として、交通の実態と特性、交通問題、交通計画、需要予測等の交通工学のソフトな分野や、交通プロジェクトの評価手法を理解する。

【授業キーワード】

交通計画、交通需要予測、費用便益分析、交通プロジェクト評価

【授業内容及び授業方法】

講義を主体に行うが、小テスト、交通問題に関するレポートの提出、交通需要予測や費用便益分析に関する演習を行う。

【授業項目】

1. 都市交通の実態と特性、交通問題
東京都圏の交通概況、地方都市の交通概況、交通混雑現象とその対策
2. 都市交通の需要予測と計画
四段階推定法
 - ・集計単位
 - ・発生集中交通量の推定(原単位法, 関数法, 重回帰分析)
 - ・分布交通量の推定(重力モデル, フレーター修正法)
 - ・機関分担交通量の推定
 - ・配分交通量の推定(最短経路探索法, 利用者均衡配分法, システム最適配分法)
3. プロジェクト評価
財務分析(評価指標、損益分岐点)
費用便益分析(利用者便益、評価指標、社会的割引率、便益帰着連関表)
環境評価(ヘッドニックアプローチ, CVM等)

【教科書】

森杉壽芳、「都市交通プロジェクトの評価—例題と演習—」コロナ社

【成績の評価方法と評価項目】

中間試験、期末試験、課題レポートにより評価する。

【留意事項】

交通工学(3年2学期)を履修することが望ましい。

【担当教員】

岩崎 英治

【教員室または連絡先】

機械・建設1号棟803

【授業目的及び達成目標】

コンピュータを利用したマトリックス骨組構造解析法を講義する。本教科により、マトリックス法による種々の連続体解析法の基礎概念を学ぶ。

【授業キーワード】

構造解析学, 力学一般

【授業内容及び授業方法】

板書, プリント, OHPを用いた講義を中心に行い, マトリックス構造解析法の理解を深めるために, コンピュータを用いた演習と実習も行う。

【授業項目】

- 第1週 マトリックス構造解析法の基本概念
- 第2週 変分法による部材剛性方程式の定式化
- 第3週 全体剛性方程式の組立て
- 第4週 境界条件等の与え方, 解析の流れ
- 第5週 連立方程式の数値計算法
- 第6週 コーディングテクニック
- 第7週 平面骨組部材の部材剛性方程式の定式化
- 第8週 立体骨組部材の部材剛性方程式の定式化
- 第9週 立体骨組部材の部材剛性方程式の定式化
- 第10週 コンピュータを用いた演習
- 第11週 コンピュータを用いた演習
- 第12週 マトリックス構造解析法による線形座屈解析の概説
- 第13週 骨組部材の幾何剛性行列の定式化
- 第14週 固有値問題の数値計算法
- 第15週 期末試験

【教科書】

なし

【参考書】

なし

【成績の評価方法と評価項目】

演習レポート(40%), 期末試験(60%)により成績評価を行う。

【留意事項】

なし

【担当教員】

細山田 得三・白石 哲也

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟807

【授業目的及び達成目標】

本講義は、水理学や水工学の応用分野の1つとして海岸・港湾における波動に関連した物理過程の理解とそれに基づいた人工構造物の設計法について習得することを目的としている。海岸にとどまらず、外洋性の海流や遠地津波などの理解も視野に入れている。また、非常勤講師による日本の港湾技術の最先端情報の学習も目的としている。教官が学生に対して要求する講義の達成目標は、波動の物理特性を把握すること、そしてそれに基づいた構造物の設計を適切に行なうことができるかということである。これらは最終試験、小テスト、レポートによって評価される。

【授業キーワード】

海岸、海洋、河川、流体、波動、海流、潮流、流体力学、港湾工学

【授業内容及び授業方法】

海岸・海洋工学に関する基礎知識を広く講義形式で学習する。講義には理解を深めるための動画によるパソコンプレゼンテーションを用いる。その場合、画面に出力される内容はプリントとして配布する。講義の始めには小テストを行い、理解を深める。港湾設計に関する設計演習問題として、設計波の決定から港湾施設設計までの流れをひととおり演習する。また非常勤講師による最新情報の解説も行なう。

【授業項目】

- 第1週 海岸海洋工学への導入 背景となる基礎理論の復習
 - 第2週 微小振幅波理論による波動の記述(速度ポテンシャルと境界条件)
 - 第3週 微小振幅波理論による波動の記述(解法と解の性質)
 - 第4週 浅海域での規則波の変形
 - 第5週 長周期波、水位変動、海岸防災、外洋海流
 - 第6週 不規則波の統計的性質と不規則波の変形、
 - 第7週 風波と波浪推算
 - 第8週 漂砂(海浜地形、底質)
 - 第9週 漂砂(漂砂量と海浜流、環境輸送論)
 - 第10週 波と構造物
 - 第11週 港湾構造物の耐波設計法(設計波)
 - 第12週 港湾構造物の耐波設計法(構造物の設計)
 - 第13週 海岸港湾技術の最新動向(非常勤講師)
 - 第14週 総合演習(波浪の物理的性質から耐波設計まで)
 - 第15週 最終試験
- 各講義の翌週に短時間の小テストを行う。講義内容をよく理解しておく必要がある。

【教科書】

「海岸工学」 服部昌太郎著 コロナ社

教官が用意するプリント

【参考書】

- 「海岸工学」 岩垣他著 共立出版
- 「港湾構造物の耐波設計」 合田良美著 鹿島出版会
- 「海岸 港湾」 合田良美 佐藤昭二著 彰国社

【成績の評価方法と評価項目】

以下のような重みで成績を評価し、60点以上を合格とする。

小テスト40%

レポート10%

定期試験50%

1. 小テストの答案が提出されていない者を欠席とみなす。
2. 小テストは電卓のみ持込可とする。
3. 講義の際、講義の間違いを指摘したり、教官の質問に積極的に答えた人は評価する。
4. 学習態度が著しく悪い場合、減点の対象となる。
5. 定期試験では電卓のみ持込可とする。

【留意事項】

1. 受講者の具備する条件:水理学IIあるいは応用水理学を受講したものが望ましい。
2. 理解困難な点、不明な点がある場合には、授業中に質問すること。授業時間以外の質問は、随時受け付けるが、電子メール等でも受け付ける。アドレス講義中に配布資料によって知らせる。
3. 板書や講義の内容に誤りを発見した場合、随時指摘を受け付ける。その場合、

その学生の成績評価に有利に考慮される。

4. 海洋性レクリエーションに興味の有る学生の受講を期待する。

5. CDROMを回覧するためパソコンによって閲覧できる環境を準備しておくことを望む。

6. プログラムを使った演習をおこなうため、パソコンによるプログラム言語を習得していることが望ましい。

【担当教員】

中出 文平

【教員室または連絡先】

環境システム棟3F中出教官室

【授業目的及び達成目標】

現代都市計画の概念の形成を知り、土地利用計画を中心とした都市計画の基本的考え方(基本理念・内容・主体・手続き)を理解した上で、計画立案について学習する。

【授業キーワード】

現代都市計画の概念形成、土地利用計画、都市基本計画

【授業内容及び授業方法】

教科書以外に、教材使用する

【授業項目】

- 1.現代都市計画のルーツ
((1)序論 (2)19世紀までの理想都市の系譜 (3)20世紀の都市提案
- 2.土地利用計画
((1)都市空間を構成する系、機能と構造 (2)土地利用計画 (3)密度計画 (4)住区と住区計画)
- 4.都市基本計画
((1)都市計画における調査／都市基本計画の考え方 (2)都市計画マスタープラン／整備・開発又は保全の方針 (3)都市計画の新しい方向 (4)都市基本計画の策定事例 (5)都市計画マスタープランの事例

【教科書】

都市計画 第3版 日笠端・日端康雄著 共立出版(株)

【参考書】

都市計画教科書 第2版 都市計画教育研究会編 彰国社

【成績の評価方法と評価項目】

レポートと試験で評価する。

【留意事項】

1学期の都市の認識に続く講義であるため、それを受講していることが望ましい

【参照ホームページアドレス】

<http://urban.nagaokaut.ac.jp/~plan>
都市計画研究室

【担当教員】

杉本 光隆

【教員室または連絡先】

建設機械1号棟808室

【授業目的及び達成目標】

大規模土木構造物や、トンネルを建設する上で必要となる岩盤工学・土木地質学の基本的事項を修得することを目的とする。具体的には

- (1) 沖積層・洪積層の土砂地盤、新第三紀層の軟岩、それより古い地層の硬岩の特徴を理解すること、
 - (2) それらの特徴が、土木工学的取り扱い方の中にどのように反映されているか理解すること、
 - (3) 地質学的視点から地盤を理解できるようになること、
- を目標とする。

【授業キーワード】

地盤工学, 岩盤工学, 地質学, 地形学

【授業内容及び授業方法】

地盤工学I, IIで得た土質工学の知識と対比しながら、多くの室内実験・現場実験結果を用いて、岩盤の基本的な特徴・工学的特徴について講義するとともに、現場施工例を用いて、地質学的観点からの地盤の工学的見方について述べる。また、板書、プリント、OHPを用いて講義する。

【授業項目】

- 第1週 土木工学の中の土木地質学・岩盤工学の位置づけ
- 第2週 岩盤工学とは何か
- 第3週 岩石の種類と工学的特徴
- 第4週 岩石の種類と工学的特徴
- 第5週 地質年代・地質構造
- 第6週 日本の地質構造の特徴
- 第7週 硬岩よりなる岩盤の特徴
- 第8週 軟岩よりなる岩盤の特徴
- 第9週 地質調査の概要
- 第10週 弾性波探査法
- 第11週 岩盤分類
- 第12週 岩盤試験の概要
- 第13週 岩盤試験法
- 第14週 施行事例
- 第15週 期末試験

【教科書】

特になし

【参考書】

「地質技術の基礎と実務」小島圭二・中尾健児著、鹿島出版会

【成績の評価方法と評価項目】

出席20%、期末試験80%により成績評価を行う。

【留意事項】

「地盤工学I, II」を履修していることが必要である。

【担当教員】

宮木 康幸

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟709

【授業目的及び達成目標】

建設プロジェクトにおいては、多くの資源(人、物、資金、技術、情報)が必要であり、これらの資源をいかに効果的に活用するかが建設マネジメントの目的である。

そこで、本科目では、土木技術者として、建設プロジェクトを合理的に進めてゆく建設マネジメントの手法の基礎を修得することを目的として、

(1) 自然に及ぼす影響を考慮した建設プロジェクト事業のライフサイクルを理解すること。

(2) 建設プロジェクトの合理的で基礎的な経済的評価手法を理解すること。

(3) 建設プロジェクト事業での土木技術者の役割を理解する

【授業キーワード】

マネジメント、プロジェクト評価、現在価値、土木法規、施工管理、工程管理、CPM、PERT、CALS、技術者倫理

【授業内容及び授業方法】

板書、配布資料を用いて講義する。

なお、ネットワーク工程管理の講義では、講義内容の理解度を調べるため、4～5回程度小テストを実施する。

【授業項目】

- 第1週 建設産業の特徴と建設マネジメントの必要性
- 第2週 建設プロジェクトのライフサイクル
- 第3週 建設プロジェクトの経済性評価(1)現在価値法
- 第4週 建設プロジェクトの経済性評価(2)代替案との比較手法
- 第5週 建設プロジェクトの組織機構と土木技術者の役割
- 第6週 建設マネジメントの形態
- 第7週 入札・契約制度
- 第8週 建設プロジェクトに関する法規
- 第9週 施工管理の必要性とその手法の概説
- 第10週 ネットワーク工程管理(CPM)とその利用法(1)
- 第11週 ネットワーク工程管理(CPM)とその利用法(2)
- 第12週 ネットワーク工程管理(PERT)とその利用法
- 第13週 品質管理とその手法
- 第14週 建設CALSについて
- 第15週 期末試験

【教科書】

特に指定しない。2～3回程度の講義内容をまとめた資料を授業の始めに配布する。

【参考書】

特に指定しない。

【成績の評価方法と評価項目】

期末試験70%、出席点10%、小テスト20%により成績評価を行う。

なお、出席点は、授業始めの点呼に遅れた場合には遅刻として半減する。

期末試験は、配布資料・ノート持込み不可、計算機持込み可で行う。

【担当教員】

高橋 修

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟704

【授業目的及び達成目標】

重要な社会基盤の一つである道路について、交通システムとしての役割と機能を理解すると共に、次の事項の知識を身につけることを目的とする。

- ①道路の計画、設計、施工、維持管理に関する基礎事項
- ②道路を建設する際に必要となる舗装材料の特性や舗装構造の特徴
- ③わが国および諸外国における舗装の構造設計法

【授業キーワード】

道路工学, 瀝青材料, 施工管理, リサイクル, ITS

【授業内容及び授業方法】

以下に記した授業項目について、教科書および配布資料(プリント)に基づいて授業を行う。要点および理解し難い内容については、適宜板書あるいはOHPを活用する。手続きが複雑な設計法等については具体的な数値を用いた演習問題を解くものとし、実際に現存する路線、道路構造を引用して理解を深める。

【授業項目】

- 第1週 道路の役割と機能
- 第2週 交通システムとしての道路の特徴
- 第3週 道路の種類と管理, および関係法令
- 第4週 道路とITS(Intelligent Transport Systems)
- 第5週 道路の計画と設計
- 第6週 舗装の役割と機能, およびその種類
- 第7週 舗装に使われている材料(種類と特性)
- 第8週 アスファルト混合物の配合設計
- 第9週 アスファルト舗装の構造とその設計法
- 第10週 コンクリート舗装の構造とその設計法
- 第11週 舗装の施工
- 第12週 特殊舗装
- 第13週 道路の排水施設と付帯施設
- 第14週 舗装の破損と維持修繕, および舗装材料のリサイクル
- 第15週 期末試験

【教科書】

「道路工学」多田宏行 編, 多田宏行, 中村俊行, 稲垣竜興, 栗谷川裕造 共著, オーム社

【参考書】

「アスファルト舗装要綱」, 「セメントコンクリート舗装要綱」, (社)日本道路協会

【成績の評価方法と評価項目】

全体の授業を2つに大別し, それぞれの要点に関するレポートを適当な時期に課する。そして, 最後の授業の際に期末試験を行う。成績はこれら2つのレポート(各20%)と期末試験の結果(60%)に基づいて評価する。成績評価においては, 授業内容を理解している程度と, 自分の考えを持ってそれを的確に表現する能力について重視する。

【留意事項】

本科目は, 数ある交通システムのなかにおける道路のみに注目しているものであり, 交通一般について包括的に取り扱っている「交通工学」を受講済であることが望まれる。

【担当教員】

下村 匠

【教員室または連絡先】

機械建設1号棟703

【授業目的及び達成目標】

社会基盤施設を形成する代表的な構造形式である、鉄筋コンクリート構造、プレストレストコンクリート構造について、

- (1) 構造物の誕生から死までに起こりうる種々の現象を科学的に理解すること、
 - (2) コンクリート標準示方書[施工編]に則った構造物の耐久性照査ができるようになること
 - (3) 構造物の設計・施工・維持管理の基本を理解し、簡単な構造物の設計演習ができる能力を身につけること、
- を目標とする。

【授業キーワード】

鋼材、コンクリート、複合材料、力学一般、構造解析、設計論、コンクリート構造、複合構造

【授業内容及び授業方法】

板書、プリント、OHPを用いて講義する。各種計算方法の講義の後には、計算問題の宿題を課し、仮定の理解と計算能力を補強する。

【授業項目】

- 第1週 コンクリート構造物の誕生から死まで
- 第2週 コンクリート構造物の要求性能と設計・施工・維持管理
- 第3週 コンクリート材料
- 第4週 コンクリート構造物の施工
- 第5週 若材齢コンクリート、構造物の初期欠陥
- 第6週 マスコンクリートの熱伝導解析・熱応力解析1
- 第7週 マスコンクリートの熱伝導解析・熱応力解析2、レポート出題
- 第8週 コンクリートの収縮・クリープ、レポート出題
- 第9週 塩害によるコンクリート中の鉄筋腐食1
- 第10週 塩害によるコンクリート中の鉄筋腐食2
- 第11週 中性化・凍結融解・アルカリ骨材反応による劣化
- 第12週 コンクリート構造物の耐久性照査1
- 第13週 コンクリート構造物の耐久性照査2、レポート出題
- 第14週 コンクリート構造物の補修補強1
- 第15週 コンクリート構造物の補修補強2

【教科書】

特に指定しない。

【参考書】

木学会:コンクリート標準示方書施工編[耐久性照査型]

【成績の評価方法及び評価項目】

レポートにより成績評価を行う。

【留意事項】

本科目で講義するコンクリート構造物の耐久性照査は、4年2学期の「建設設計製図II」のコンクリート構造物の設計課題に取り組む際の基礎となる。

測量学実習II
Surveying Practice 2

実習 1単位 1学期

【担当教員】

陸 旻皎・力丸 厚

【教員室または連絡先】

環境システム棟653室

【授業目的及び達成目標】

新しい手法の測量手段として、また地球環境のモニタリング手法として、近年進歩の著しい衛星リモートセンシングデータ及び数値地形データを簡単なプログラミングによって処理し判読する手法を、実習を通して体得する。

【授業キーワード】

数値地理情報、地理情報システム、リモートセンシング、幾何補正、プログラミング

【授業内容及び授業方法】

簡単な衛星画像データ・地形データを基に画像処理の実習を行う。

【授業項目】

- 1)画像データの表示(カラー合成、濃度変換)
- 2)幾何補正
- 3)画像強調による判別
- 4)地形データの処理

【教科書】

日本リモートセンシング研究会編『図解リモートセンシング』

【成績の評価方法と評価項目】

実習レポート提出、出席を前提とする。

【留意事項】

本実習は、3年次に開講される「多次元情報処理工学」で学ぶ衛星情報の利用および地理情報システム(GIS)の分野、および4年次の「リモートセンシング工学」での講義内容に基づいている。また、3年次の「環境・建設計算機実習I」及び「環境・建設計算機実習II」で学ぶプログラミング手法の知識を前提としている。したがって、本実習履修の予定者は、これらの講義を履修する必要がある。本実習は可視・赤外の衛星リモートセンシングのみの範囲であるが、大学院では、環境システム工学専攻の「環境計測工学特論I」において、マイクロ波リモートセンシングによる広域情報抽出手法について学ぶ。なお、大学卒業の測量士の資格取得のためには、本講義単位を取得することが必要である。

【担当教員】

早川 典生・山田 良平・向井 幸男

【授業目的及び達成目標】

様々な時空間スケールにおける物理過程・化学過程・生物過程が一つのシステムとして相互作用する場としての地球の捉え方を学ぶとともに、その実態把握のための観測手法と将来予測のための監視システムとモデルについて基本的な考え方を学ぶ。

【授業キーワード】

(第一部 早川担当分)地球と惑星、大気圏、水圏、エネルギー収支、平衡温度、温室効果、物質循環のモデル化、滞留時間、大気汚染

(第二部 山田担当分)生態システム、光合成、炭素および窒素循環、原始地球生態系、ラン藻、酸化還元境界層、生物陸上進出、生物多様性、人間圏、安定同位体比、同位体効果

(第三部 向井担当分)衛星による地球観測システム、衛星による陸域、海洋、大気の観測

【授業内容及び授業方法】

板書、プリント、OHPを用いて講義する。

【授業項目】

第一部 早川担当

第1週 地球と惑星、大気圏と水圏の構造

第2週 物質循環(炭素、水)、ボックスモデルと滞留時間、物質循環のさまざまなモデリング

第3週 大気汚染と水質汚染の仕組みとモデル化、地球へ降り注ぐ太陽エネルギー、平衡温度

第4週 大気の温室効果と温暖化現象、大気の循環と海洋の循環

第5週 第一部試験

第二部 山田担当

第6週 生態システムとは、その形成と変遷

第7週 原始生態系から酸化還元境界層成立

第8週 好気的微生物出現から動物の出現、人間圏の問題

第9週 安定同位体比を用いる生態系研究法

第10週 第二部試験

第三部 向井担当

第11週 衛星による地球の観測システム

第12週 衛星による地球の陸域の観測

第13週 衛星による地球の海洋の観測

第14週 衛星による地球の大気の観測

第15週 第三部試験

【教科書】

特に指定しない

【参考書】

岩波講座 地球惑星科学 第2巻「地球システム科学」岩波書店、岩波講座 地球惑星科学 第4巻「地球の観測」岩波書店

【成績の評価方法と評価項目】

1.評価は定期試験による(各教官の分担毎に行う)

2.評価項目

第一部

- ・大気圏水圏の構造と動態、
- ・物質循環の動態とモデリング、
- ・太陽エネルギーと地球上でのバランス、
- ・大気汚染水質汚染の仕組みとモデリング

第二部

- ・生態システムの基本構造と、陸域および水域の生態システムの特徴を説明できる。
- ・生物がその発生以来、地球表層の物質と共進化してきた道筋を説明できる。
- ・人間圏出現の影響を具体的に説明できる。
- ・安定同位体比を用いる生態系研究法の原理を説明できる。

第三部

- ・衛星による地球観測の項目とその観測方法

【留意事項】

本講義は、地球システムに関する概論であり、「環境生物化学」、「流体基礎工学」、「大気水圏動態解析」、「生態物質エネルギー代謝」等より詳しく水、エネルギー、物質の循環と地球環境との関係を学ぶ。また、「画像情報処理工学」、「リモートセンシング工学」においては、地球システムのモニタリングと解析手法について学ぶ。

【担当教員】

原田 秀樹・小松 俊哉・藤田 賢二

【授業目的及び達成目標】

従来土木工学系学科で講義されてきた「上水道工学」、「下水道工学」、「衛生工学」を「水環境・水循環工学」として再構成・再体系化して、生活環境における水循環システム、上水道・下水道の役割と構成、水質変換プロセスの原理を修得する。

【授業キーワード】

水循環システム, 上水道, 下水道, 水質, 水質変換プロセス, 汚泥処理

【授業内容及び授業方法】

板書, プリント, OHPを用いて講義する。講義中に小テスト, 各種計算問題を多用し, 応用能力を涵養する。

【授業項目】

- 第1週 水の物性と循環
- 第2週 水質指標と水質環境基準
- 第3週 河川および湖沼における水質変換過程
- 第4週 上水道の構成, 基本計画, 水質基準
- 第5週 上水道の施設計画
- 第6週 浄水の単位操作1－凝集, 沈殿
- 第7週 浄水の単位操作2－ろ過, 消毒
- 第8週 浄水の単位操作3－高度浄水, 汚泥処理
- 第9週 下水道の役割および種類と構成
- 第10週 下水道計画の手順と計画下水量の算出
- 第11週 下水の生物学的処理技術(標準活性汚泥法等)
- 第12週 下水の高度処理技術と再利用
- 第13週 下水汚泥の処理, 処分と有効利用
- 第14週 期末試験

【教科書】

「環境衛生工学」津野、西田著(共立出版) また、適宜参考資料を配布する。

【成績の評価方法及び評価項目】

持ち込み不可の期末試験70%、小テストおよび出席点30%により成績評価を行う。期末試験では主として説明(論述)問題と計算問題を出题する。

【留意事項】

高校・高専での専門基礎レベルの「化学」を理解していることを前提として講義を進める。
本科目は3年2学期の「環境生態工学」、4年1学期の「環境微生物工学」「微量有害物管理工学」と関連が深く、それらの基礎となるものである。

【担当教員】

力丸 厚

【教員室または連絡先】

環境棟655

【授業目的及び達成目標】

リモートセンシング技術の基本項目を学習し、境界領域技術であるリモートセンシング工学の体系を理解する。

【授業キーワード】

リモートセンシング, 人工衛星, 地球観測, センサ, プラットフォーム, 電磁波, 画像処理, 地理情報システム(GIS)

【授業内容及び授業方法】

リモートセンシングの基本概念, センサ, プラットフォーム, リモートセンシング観測データ素材, デジタル画像処理, リモートセンシング応用事例, 地理情報システム等を講義形式で解説する。

【授業項目】

1. リモートセンシングの基礎
リモートセンシングの基本概念, 基本原理を解説する。
2. センサ
センサの種類, 構造, 機能, 内容を解説する。
3. プラットフォーム
センサを搭載する衛星, 航空機等の種類, 内容, 特徴を解説する。
4. リモートセンシング観測データ素材
リモートセンシングデータの基本的な内容・種類, 入手方法等を解説する。
5. デジタル画像処理
衛星画像データ等のデジタル画像処理手法に関して, 解説をおこなう。
6. リモートセンシング応用事例
各種の応用事例を解析結果画像を交えて紹介・説明する。
7. 地理情報システム
地理情報システムの基本概念と利用方法を, 実例を用いて解説する。

【教科書】

「図解リモートセンシング」日本リモートセンシング研究会編, 日本測量協会

【成績の評価方法と評価項目】

試験による。

【留意事項】

本講義内容は3年次の画像情報工学(旧; 多次元情報工学)の内容と連携しているため, 事前に画像情報工学の履修が望ましい。